

# 明治を描いた画家ロバート・ブルーム —日本での日々—

大野順子ロスウェル

Copyright © 2015 Junko Ono Rothwell. All Rights Reserved.

ブルーム (Robert Frederick Blum) はニューヨークの出版社、スクリブナーズ・マガジンから派遣されて明治 23 年 (1890 年) に来日し、2 年 3 か月滞在した。アメリカに帰国後に三回にわたって同誌に書いた “An Artist in Japan” という記事と日本からアメリカの画家仲間たちに出した手紙、そして日記<sup>1</sup>をもとにブルームの日本での足跡を追ってみたい。

ブルーム 5 月 21 日にチャイナ号でサンフランシスコを発ち、6 月 6 日に横浜に着いた。この時彼は 32 歳だった。ずっと憧れていた日本にやっと着いた感想を次のように述べている。

「漠然とした緊張感で翌朝目を覚ました時 耳にはまだ汽笛の音が響いていた。エンジンの振動と心拍が聞こえるはずなのに船の脈動は弱々しくほとんど聞こえなかった。再び汽笛の叫び声 — のどが痛いような耳障りな音、イライラしているような— を聞かなくても窓を見れば何かおかしいと分かった。なぜ通常の半分のスピードなのだろうか。それは霧のせいだった。霧の淡いぼんやりした光が船の窓から入っていた。甲板に出てみると船室よりもっと見渡すことはできたが、この天気をもたらした状態にじりじりして、がまんできない気持ちは消えない。それでもじっと見続けた。空気はどんよりしていた。どこを見ても周りには湿った霧が立ちこめていた。六月の朝が実際は春なのに北極の冬の中にいると信じられるほどひどく冷たい異例の現象をもたらした。滑りやすい甲板を寒さで震えながら歩いて、水夫たちが港へ向けたいろいろな準備をしているのを気の抜けた感じで見ていた。通路で私がぶつかったせわしい乗客たちはだんだんと群れになって煙突の周りの暖かい場所に集まってきた。我々の目的地である横浜をこんなに遠くに感じたことはなかった。この世に存在しないとさえ思われてきた。しかし、意外なことの一つの間にか静かに霧が晴れ海の上に塊となって漂っていた。目の前には広々とした江戸湾、なめらかでのんびりと乳白色の光の中でサテンの光沢のようにきらりと光っている。太陽はベールに包まれ、空に揺らめいている銀のドームを作っている。そしてそこかしこにもやが 玉虫色に光り、あちこちに光の線が見える。遠くまでたくさんの優しいバ



ロバート・ブルーム 1875 年頃

<sup>1</sup> 来日して最初の 13 か月の日記が残っている。アリゾナの Robert B. Haller 所蔵

ラ色の光の筋を送っていた。大地の上の高い所に虹のごとく幻影のように浮かんでいるのは — 雪が現れて — 富士山の頂上だ。」<sup>2</sup>

画家として日本に行ってみたくてブルームはずっと思い続けていた。

「……私は日本にかなり期待をしていた — 興味深いだらうと思った — 私を魅了するだらうと思ったが思った以上だった — 期待していた以上だった。(中略) モロッコやその北の街タンジールがフォートウニ<sup>3</sup>の才能を生かしたように、日本は この国を最初に掴むほど才能のある画家であれば、同じように機会を与えてくれるだらう。良い話じゃないか？ 私は今まで人生の辛苦をなめてきたのだが日本ではうまくいくかもしれない。」<sup>4</sup>

ブルームはニューヨークから執行弘道<sup>5</sup>という日本人と一緒に旅して来た。執行弘道は当時ニューヨークで日本の美術品を扱っていた。日本やヨーロッパを行き来し、画家の集まるクラブに出入りし多くの芸術家と交友があった。英語に堪能で“Japanese Art folio”など日本の美術についての本を英語で出版している。ジャポニズムを広めるのに貢献した。

二人はニューヨークで知り合い、執行のおかげで第3回内国勸業博覧会の審査員という肩書を出発前にもらうことが出来たので横浜の税関も特別扱いでさっさと通ることが出来た。まずは横浜のグランドホテルに泊まった。そしてすぐ執行の友人の家に招かれ初めての日本の家と昼食を体験することになった。そのあと東京に向かう。

東京ではひとまず東京ホテルに落ち着いた。ここに2か月滞在した。着いて間もないのに執行に紹介されていろいろな人に出会う。執行はブルームを芝公園内にあった紅葉館という社交場に連れて行った。その様子は“Maple Club”と題してジャポニカの挿絵になっている。そのころの忙しい日程は次のようだった。

6月12日 執行と共に林忠正に会う

6月14日 フェノロッサを訪ねる

6月22日 再びフェノロッサに会う

ブルームは執行には大変世話になったと、アメリカの友人に宛てた手紙に書いている。

---

<sup>2</sup> Robert Blum “An Artist in Japan” Scribner’s Magazine April 1893

<sup>3</sup> Mariano Fortuny 1838-1874、スペインの画家。ブルームが最も感銘を受けた画家

<sup>4</sup> Robert Blum “An Artist in Japan” Scribner’s Magazine April 1893

<sup>5</sup> 1853-1927、英語では“Shugio”と表記されている。

「執行を通じて私は上流階級の人々と知り合いになっている。この人たちはこれから私の役に立つのは間違いない。もうすでに博覧会の外国の審査員に選ばれた・・・」<sup>6</sup>

第3回内国勸業博覧会は明治23年4月1日から7月31日まで上野公園で開かれこの時の審査部人名表には審査諮問員としてフェノロッサと並んでブルームの名前が記されている。

ブルームはフェノロッサを二度訪ねて行った。フェノロッサは東京大学で哲学などを講じていたが岡倉天心を同行して日本美術の調査も行い自らも収集していた。ボストン美術館での東洋部長の職を得て帰国することになった。

6月14日に初めてフェノロッサに会いに行く。「今朝フェノロッサ氏を訪ねた。とても良い人だ。彼はボストン美術館の職に就くため帰国する目前だ。彼ほど真に日本美術を評価している人に会ってうれしい。日本の最良のコレクションを持って帰るのはアメリカにとってもいいことだ。残念ながらもうほとんどは梱包されていて私は見る事が出来なかった。しかしまだ手元にある数点をみせてくれると約束してくれた。」<sup>7</sup>

6月22日再びフェノロッサを訪ねその日日記に次のように書いている。「彼は徹底的にそして真剣に日本美術に関わる最初の人だろう。ボストンでどうするのかぜひ知りたい。」

執行が紹介した中にはニューヨークのイブニング・ポストの記者ヘンリー・フィンクもおり、彼は後に書いた本の中で、執行がフィンクとブルームを有名な茶屋へ連れて行ってくれたこと、ブルームに招かれ隅田川で船を雇って昼間であるが花火を楽しんだこと、そして芸者遊びをした時のことを述べている。その時ブルームとフィンクは双子かと芸者たちに聞かれた。二人の共通点は金髪しかないのにどうして双子だと思うのかと聞き返すと、「外国人はみんな同じに見える。みんな鼻が大きいんだもの。」と芸者たちは答えたという。<sup>8</sup>

着いて11日目に日本の最初の印象をニューヨークのウィリアム・メリット・チェイスに宛てて次のように書いた。

「さて日本について聞きたいだろう！ まだ考えをまとめるのに忙しく、日本にいるという実感がない。これまでにない不可解な経験だ。一時間に一日分の経験を押し込んでいる。ずいぶんたくさん見たし新しいことを感じた。戸惑うほど面白い。別世界の生活ぶりだ。新しい世界だとしか言いようがない。それなのに不思議となじみ深い気もする。

---

<sup>6</sup> Otto Henry Bacher への手紙 1890年6月22日 American Art Archives, Smithsonian, Washington DC

<sup>7</sup> 6月14日の日記

<sup>8</sup> Henry Theophilus Finck “Lotus-Time in Japan” 1895

少し日本の美術を知っているから美術を通じて何となくこの世界がもう分かっている気がした。日本の生活ぶりを見たらなるほど日本の美術はこうして生まれたのかと思った。東京は家がめちゃくちゃに並んでいるがニューヨークより面積は広い。アメリカの三つの街よりも東京の一つの通りの方が絵になる。ここは絵の題材にあふれている。静かで規則正しく清潔だ。建物は小さく単純で見栄えのしないものだが通りのにぎやかさのいい背景となっている。でも日本人は色と形を愛することをどこかで見せなきゃいけないので 店や家のちょっとしたところに表わしている。それが画家の目を楽しませる・十分な時間があるのでまだ仕事に取り掛かる気にはなれない。これからできるだけ静かにじっくりみてみよう。」<sup>9</sup>

その5日後に友人オットー・バッチャーに宛てた手紙。

「私が抱いたのはこれまでに最も素晴らしい経験だと言うことだ。恋におちたら相手の魅力がなにもかもを包んでしまうということがあるだろう？今のところ日本は私にとってその状態なのだ。日本を私のためにこのままにして置いて下さいと祈っている。私は魅惑の地に足をふみ入れたのだ。私の人生の中でぼんやりしたあこがれだった期待が本当になったたった一つの例だ。できるだけ長くこの国にいたい。1年か2年か分からない。状況に任せる。健康が保てるならいつまでもいたい」<sup>10</sup>

手紙には似顔絵やイラストを入れ、自分の名前は「ボブ」と署名している。覚えてたの日本語も余白に書いた。その一つに自分の“Blum”という苗字を「ブルーム」とカタカナで縦書きに書いている。

チェイスとブルームはヨーロッパを共に旅行し仲が良かった。彼はアメリカ印象派の画家として有名になった。バッチャーはチェイスほど有名ではないがやはり画家でブルームの留守の間ニューヨークのアトリエの世話をしたりと親身になってくれた。どちらも後に



日本語で「ブルーム」とサインした手紙 友人バッチャーの似顔絵を描いている。1890年11月20日

<sup>9</sup> William Merritt Chase への手紙、1890年6月17日 Chase はアメリカ印象派を代表する画家

<sup>10</sup> Otto Henry Bacher への手紙、1890年6月22日 American Art Archives, Smithsonian, Washington DC

自分の子供にブルームの名前から取って「ロバート」「ロベルティーナ」と名付けるほど親しかった。

チェイスの手紙に書いたように、この東京ホテルにいる間はさあこれからゆっくりと日本をみてみようとして初めての世界に心を躍らせていた。まだのんびりと構えていたのだ。

ところがそうはしておれない状況に追い込まれる。エドウィン・アーノルド卿<sup>11</sup>からの挿絵の催促が始まったのだ。

ブルームが日本に来たのはアーノルドの「ジャポニカ」と言う記事の挿絵を描くためだった。3回連載の予定だった。アーノルドは明治22年(1889年) 娘と共に来日し、麻布に住んでいた。

アーノルドはもう記事をかなり書き上げていて、ブルームが来るのを待ち構えていた。

アーノルドからブルームに宛てた最初の手紙はブルームが6月6日(金)に横浜に着いた直後だと思われる。日付は「土曜日」とだけ書かれているので着いた翌日の7日だろう。

横浜グランドホテル、「China」乗客、Robert Blum 宛

「着きましたね、歓迎します。我が家に日曜午後1時に昼食にいらっしゃいませんか。人力車にこのカードの住所を見せて下さい。」<sup>12</sup>

この後すぐにブルームは麻布今井町のアーノルドの家に出かけて行った。この時描いた家の2枚のスケッチが「ジャポニカ」に載っている。2枚目のには6月11日の日付が入っている。

アーノルドの挿絵の催促が次々にやってくる。

1890年7月9日ブルーム宛

「スクリブナー誌への3部の記事原稿のうち、第1部を書き終えたので 今週、東京ホテルに行って君に手渡します。(中略) 麻布今井町41宛てに送ってください。帰って来たら君の家も見つけよう。」

次のは1890年7月17日、麻布今井町41からブルーム宛

---

<sup>11</sup> Sir Edwin Arnold, 英国の詩人、ジャーナリスト

<sup>12</sup> アーノルドからブルームへの手紙はすべて New York Public Library Archive より

「第2部の原稿です、これでしばらく十分な仕事があるでしょう。挿絵を描いたらスクリブナーに送ってください。」

最後のは1890年、8月2日。アーノルドが東京ホテルにブルームを訪ねていったのにブルームが不在だったので、ホテルのフロントにこの伝言を残したのだと思われる。

「どこにいるんだい？ここに第3部の原稿を残していく。挿絵を8月半ば、または8月末までには仕上げてニューヨークへ送ってもらいたい。スクリブナーズはクリスマス前には（印刷の）用意ができていようにしたいそうだ。（後略）」

ブルームは着いてすぐ挿絵を仕上げねばならないのでかなりプレッシャーを感じた。まだ東京の街にも慣れないのにアーノルドからの矢のような催促。それに加えうだるような暑さ。「東京は暑かった。一か月前の快適な灰色の日々の後、暗くて今にも崩れそうな天気の日がやってきた。かなりの風と雨が続いた。しかし、今、真夏に近づいている。澄んだ耐え難い空にある太陽の灼熱はすさまじく苦しめられた」と書いている。

とうとう、東京を後にし、写生旅行に出かけることにする。向かったのは江の島、そして箱根だった。

「少なくともどこまで行くのか私はまだ決めていない — 江の島、箱根、そして富士山のまわりのスケッチに挑戦するようなものだ — 」<sup>13</sup>

日本語をしゃべれないブルームがどうして旅が出来たのか？実は一人の日本人の友人が出来てこの旅に同行しいろいろ世話をしてくれた。ただほとんど英語が出来ないので意思の疎通には苦労したようだ。しかし、一緒に旅をするうち、「彼に理解できる程度の英語で話せば」だんだんとブルームの考えを読み取るようになり役に立っていく。

この友人の名をブルームは後に書いた“An American Artist in Japan”の記事の中で「カツシカ ヨリカズ (Katsushika Yorikazu)」と言っている。そして彼の名が長すぎて言いにくいのでピーターと呼ぶことにしたと書いている。しかしこれは創作上の名前だと私は思う。というのはブルームの日記にも日本からアメリカの友人に送った手紙にもそんな名前は出てこない。代わりに「Miyake」という名前がたびたび現れる。多分、「三宅」ではないだろうか。このミヤケという人はサンフランシスコの領事館で働いたことがあって英語ができたらしい。ミヤケはブルームの日本滞在中にずっとあれこれと手助けをしてくれた。そしてアメリカに帰国する際にいっしょに付いて行った。ブルームブルームの死後もシンシナティの家族と連絡を取っていたとブルームの孫姪は言っている。このミヤケという人物は多分、執行から紹介された三宅巍<sup>14</sup>という人物ではないかと考えられる。

<sup>13</sup> Robert Blum “An Artist in Japan” Scribner’s Magazine May, 1893

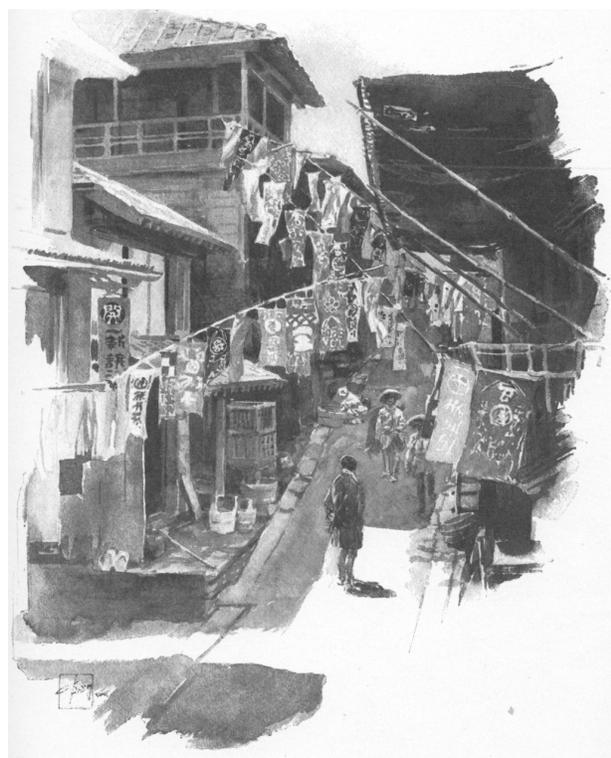
<sup>14</sup> 毎日新聞の記事の中でフィンクと並んでこの名が出てくる。フィンクは執行から毎日新聞記者、矢部を照会されたとあるのでブルームも執行を通じ、矢部、三宅と知り合ったのではないかと推測される。

この旅もアーノルドの日本的な風景を挿絵にとの要望によるものではなかったのだろうか。アーノルドはブルームの来日の少し前に江の島、箱根へ旅している。江の島ではアーノルドの滞在した岩本楼にブルームたちも泊まった。

江の島では食べ物やノミに悩まされるが 風景はすっかり気にいったようだ。

「私はここで絵になる場所をたくさん発見した。」<sup>15</sup>と書いている。

「7月28日。 午後、昨日始めた素描を続けるため弁天様の洞窟に行く。雨が降ってきたので洞窟に避難する。岩に当たって砕ける波を前景に、富士のシルエットが今にも崩れそうな曇り空を背景にして遠くに浮かぶ。



A Street Scene, Enoshima

7月31日。風の強い嵐の日。窓からパステルでスケッチをする— パステルはこの天気の湿気のせいで粘っこくなった。午後には、岩に行った。水位は非常に高い。それは良かった。私は岩に座り、雨が降り始めた時には K (カツシカ) が私の頭上に傘をさしてくれたが、それでも風がスケッチブックを持ち上げ、それが膝に当たるので何をするのも難しかった」<sup>16</sup>

「ジャポニカ」には江の島でのスケッチ3枚が載っている。

江の島で10日ばかりスケッチをしていたが、突然宿の主人がブルーム宛の電報を持ってきた。それはニューヨークの編集者からですぐに東京に帰り挿絵を仕上げろとあった。

しかし、ブルームは電報を無視して旅を続けることにする。

---

三宅はサンフランシスコに明治20年から23年まで滞在、帰国後の住所はブルームの有楽町の住所と同じ。広島県出身。

<sup>15</sup> Robert Blum “An Artist in Japan” Scribner’s Magazine May, 1893

<sup>16</sup> Robert Blum “An Artist in Japan” Scribner’s Magazine May, 1893

「そうだよ、彼らは私の素描を見たがっているんだ — 私は東京に帰ってよい絵を描いてアメリカに送らなくちゃいけない。でも元気を出せ、富士を見ないで帰ることはないさ。こんなに近くまで来ているんだから、とにかく富士の麓まででも行こうじゃないか。そのあとで君は私を連れて帰ればいいさ。」<sup>17</sup>とカツシカさんに言う。

江の島を後にした二人は汽車で湯本まで行きそこから馬車鉄道で宮ノ下まで行くことになった。この馬車鉄道で若い貴族の青年と会う。彼は子爵の長男でハーバード大で学びオリバー・ウェンデル・ホームズ博士と懇意にしていた。卒業してボストンから帰国したばかりだった。

この子爵の長男のモデルになったのは明治の政治家で子爵だった金子堅太郎ではなかったかと思う。金子はハーバード大で法律を学びホームズ博士と親しかった。そして1年間の欧米視察を終えてブルームと同じ船で帰国している。船の旅の間に知り合ったのではないだろうか。金子はロンドンでホイッスラーとも会っているので後に述べるようにイタリアでホイッスラーと一緒に制作したブルームとは話がはずんだのではないかと思われる。しかし当時金子はもう37歳で結婚しており、ブルームが自分の記事の中で書いている父に結婚を進められている青年貴族という記述には当てはまらない。金子をモデルにしたが、年齢など所々変えてあると思う。

そして3人は峠を越え宮ノ下から箱根まで歩いた。

「我々は日の出前に起き、箱根に向かって山を登った。(中略) 独特の魅力がある美しい田舎を通り抜けた。楽譜をみせても生の音楽が伝わらないのと同じように写真や絵をみせてもその美しさを十分伝えられない。画家としてよりも、人間としてもっと印象的で美しく心を動かされたのは特徴的な — 絵には描けない — 山の風景だった。」<sup>18</sup>

ところが箱根からの富士山の眺めについては次のように書いている。

「ここからの富士山の眺めは私が期待していたものではなかった。大部分は隠れ、高い山頂だけを湖の反対側に見せていた。私は富士山を見るためだけにここに来たのに。私は多少がっかりした……」<sup>19</sup>

さらに箱根から御殿場まで歩いた。笹で覆われたジグザグの道を上り尾根に出ると目の前に広大な景色が広がっていた。

「我々が休んだ頂上は、眺めが見渡せるので一般的に「美しい」と言われている。個人的には、私はパノラマを好きではない。「規模が大きい」からといってそれが必然的にすばらしいとは言えないと私は考えるし、多くの画家たちもそう思っていると信じる。」

---

<sup>17</sup> Robert Blum “An Artist in Japan” Scribner’s Magazine May, 1893

<sup>18</sup> Robert Blum “An Artist in Japan” Scribner’s Magazine June, 1893

<sup>19</sup> Robert Blum “An Artist in Japan” Scribner’s Magazine June, 1893

そして御殿場でまた富士と向き合うことになる。

「御殿場。私はここまで登ってまた下り、「富士」を見に来た。箱根では手前にいろいろあって富士山はほとんど見えなかった。ここでは、すべて富士だ。正直に言うと、私は富士山を描くのにあたって二つの「前景」を選択できた。広がった鉄道の駅、牛舎のような建物、無塗装の木材のシンプルさの中に汽車とざわめいている群衆だ。もう一つの選択は、山に向かって数学的な正確さで伸びている広い、その荒涼の裸を隠すための木や家のない、長く美しい埃っぽい道だ。」<sup>20</sup>

後者の構図を選んだのだろう、御殿場で「ジャポニカ」に載せる1枚のスケッチを仕上げたが、それは雲のかかる富士山を遠景に手前に道が続いている。そして単調にならないように店や人物を加えている。



Fuji San from Gotemba

「絵になる場所が欠けているこの場所にとどまることは無駄だ。もう少しまともな場所が見つかるチャンスはわずかしかない。これ以上時間を無駄にしたくないので私はただちに東京に帰ることに決めた。」

せっかく富士を描くために来たのに、ブルームはインスピレーションを得ることが出来なかった。少しは描き始めてみたらしいが、うまくいかず、消してしまったということだ。富士そのものも構図がうまくいかないとっているし、

パノラマも好きではないと言う。風景画にはあまり興味を持てなかったのだろうか？

実際にブルームの残した風景画はわずかしかない。そのひとつブルームの江の島を描いたパステル画をアトランタの個人コレクターの展覧会でみたがざっと描いたスケッチ風で抽象的といえるほどだった。

ともかく、ブルームは東京へと引き返した。東京ホテルで挿絵に没頭することとなった。ところがホテルでは仕事がやりにくいと感じたブルームは街中に住みたいと思い始めた。その願いを叶えてくれたのは またしてもカツシカさんだった。皇居の近くの有

<sup>20</sup> Robert Blum "An Artist in Japan" Scribner's Magazine June, 1893

楽町3丁目1番地に一軒家を見つけてきてくれたのだ。当時、外国人はみな築地の外国人居住地に住まなければならなかった。例外として特別な場合はその外に住むことが認められていた。そこでブルームはカツシカさんの英語の個人教師ということで役所に出かけて行き許可を取ってきた。有楽町に住むことを許されたわけだ。

「それこそ小さな家だった。その全体が、ニューヨークの私のアトリエにすっぽりと入るだろう。庭、つまり植物や低木があれば庭と呼ぶだろう空き地は、まさに私の必要としていたものだった。庭にならないからこそぴったりのものだ。モデルの屋外のポーズのために非常に良い場所だった。それと立地が便利な場所なのでより良いものが見つかるまで一、二ヶ月間借りる事を私は決めた。」<sup>21</sup>

こうしてブルームの東京でのアトリエ兼自宅が決まった。結局ずっとここに住むことになった。

「有楽町三丁目一番 東京、1890年9月1日。

親愛なる-----へ：私は新しい家から君に書いている。

私は二日前にホテルから荷物を持ってきた・・・

家は小さくてちょっとしたものだ。一階に10フィート四方の大きめの部屋がある。それから二つの小さな部屋、両方一緒にだいたい大きな部屋と同じ大きさだ。別の小部屋と台所が残りの部分を占める。次に、二階には床の間付きの一部屋。家の二辺にある縁側は私に日光をたくさん与えてくれる。あなたに良く分かるようにここに二階のだいたいの図面を描く。この家は「有楽町（楽しみのある道）」にあることを言わなければならない。私がここの住民になって以来、これまでその名前と矛盾していない。家は、通りの突き当たりにおいて実際に道はうちの門に突き当たる。私は幸福の非常に頂点にいるのを感じてはいけない理由はない。

カツシカさんの助けなしではどうしてできたか、私には分からない。彼の巧みな世話のおかげで私はここにいる。」<sup>22</sup>

ここでモデルが来る日は庭であるいは室内で制作したがモデル探しには苦勞したようだ。

---

<sup>21</sup> Robert Blum “An Artist in Japan” Scribner’s Magazine June, 1893

<sup>22</sup> Robert Blum “An Artist in Japan” Scribner’s Magazine June, 1893

「午後はモデルと庭で仕事をする。それか今日のようにモデルを探しに出かける。それはいつもどきどきする。私が内気なのか、それとも自分が危ないところに入ってしまって逃げられなくなるんじゃないかと心配しているせいか分からないが、滑りやすいモデルを私の網の中にやっと捕まえるのに数週間、あるいは数ヶ月もかかることもある。」<sup>23</sup>

執行やミヤケにもモデル探しを頼んで連れてきてもらい庭で描いた。こういうふうに立ってくれとかいろいろ注文をつけ、それをミヤケがモデルに通訳した。時には日本の画家にもモデルを紹介してほしいと頼んだ。ソヤマ (Soyama) という画家に頼んだが、アメリカ人のモデルには向かないだろうと言われたと9月25日の日記に書いている。

家には女中と庭師を雇っていた。彼等もブルームのモデルになった。ジャポニカの中の挿絵「The Flower-peddlers」のモデルは彼等だと日記に書いている。

時にはアーノルドやその友人のウィグモア<sup>24</sup>、そして執行の家を使うこともあった。執行はアーノルドと同じく麻布に住んでいた。彼らの家の中や庭でモデルにポーズしてもらった。



The Flower-peddlers

モデルの背景にはあとから街の写生を付け加えることもあった。挿絵の中には街を歩く女性や寺の境内の子供たちなど人々の生活の様子が生き生きと描かれている。これらはもちろんその場で写生したのもあるが、まずジャポニカの挿絵にふさわしい構図を考え、モデルを使って描き、それに合う背景を街で写生してきた人物画と組み合わせたといい流れだった。写真を使って描くこともあった。

モデルの来ない日は 外に写生に出かけた。ヨーロッパでは覗きに来る人々には慣れていたが、日本ではたくさんの人

<sup>23</sup> Robert Blum "An Artist in Japan" Scribner's Magazine June, 1893

<sup>24</sup> J. H. Wigmore 慶應義塾大学で法律を教えた

が彼を觀に群がってくるのに閉口した。

「モデルが庭でポーズしない場合は、私は、外出する。ここ数日は、徳川時代の六人か八人の将軍が埋葬されている芝のお寺の境内へ行っている。内緒だが実は私は、外出がいやだ。文句は言いたくないが、静かで控えめではあるが多くの人々がじろじろ私を見るからだ。」<sup>25</sup>と述べている。

ある日ブルームはパステルで写生していた。その時のことをブルームはこう書いている。

「通りで写生をしていると周りを取り囲んだ人々が長いこと私と私の絵を觀察している。そのうちみんなが言っているのが聞こえた。「うまい、うまい」最初は「うまい」の意味が分からなかったがミヤケがそれは詩や絵画をみて感嘆した時使う言葉だと言った。文字通り、「うまい、食べたいほど上手だ」ということだ。」<sup>26</sup>

9月21日の毎日新聞にブルームへのインタビューが載った。ブルームの庭での制作の様子が書いてある。

「 会話 ラバルト、ブルーム氏 O. S. Y.

と余は嘗て一面の識あり即ち去る十九日有楽町なる氏の邸に寄りしに恰も縁側に二人の行商人あり共に婦人にて早や恥かし気を離れし四五十の年頃鏡とぎか蝙蝠傘の張替えを為して其日を送る者の類なり余怪しんで問ふて曰く彼等は何者ぞや何が為に來り居るか氏は彼等の英語を解するかを恐る恐る如き風情にて小声にて曰く彼等は我が為の恩人なり我は彼等に依りて以て糊口する事を得るなりと余尚其理を解する能はざりしに氏は側に在る紙片を指して曰く我は之をニューヨークに送りて出版せしむるなりと見れば即ち彼等の肖像を寫せしものにて恰も半ば半ば成りしの畫なり余曰く君は自ら之を出版して発売せらるるか氏曰く否我は之をスグリブナー雑誌社に送りて挿絵と為すなり。

茲に於て余は始めてスグリブナー雑誌より派遣せられしものなりとを知り曰く余嘗て聴米國雑誌の挿絵は遙かに欧州諸国の上にありと果して然るか氏曰く然り真に然り米國挿絵の進歩せるとは英人の驚嘆する所にして佛人の稱賛する所なり米國に於て挿絵ある雜誌中スグリブナー、センチユリー、ハーパースウイキリーは尤も整頓するものにして文學上の価値に於ては歩をセンチユリーに譲らざるを得ざれども挿絵の美麗なる事はハーパースウイキリーにて我雑誌の如きは文學上に於て又挿絵にて於共に中間の地位を占むるを以て之を折算すれば何れも互角の勢を有せり、ハーパースは近時世界一と稱せらるるアペー氏ありて挿絵を主宰するを以て諸事盡く整頓し紙面に光彩を添ゆる事を得故に米國挿絵の世界に冠たる所以はアペー氏のいるいるが為なりいふも不可なきなり。

<sup>25</sup> Robert Blum "An Artist in Japan" Scribner's Magazine June, 1893

<sup>26</sup> Martin Birnbarn, Painters: Sculptures, Artists. 1919

此時余は話頭を転じて曰く君は日本畫を見て如何なる感想を起すか氏曰く我は日本畫中に於て尤も北齋の畫を好めり請へらく是れ畫中の畫なりと、床上に是真の畫あり雨中の花を寫す、氏之を指さして曰く是真は日本に於ては格別有名なる畫家にはあらざるべし然れども畫中自ら言ふべからざるの趣味あり一氣一畫具法を得て其真を示すに足る是れ我が日本に來りて新に得たるの知識なり余曰く洋畫は・に科学の方法に由て支配せられ我が畫は文學の思想によって支配せらるるを以て各一長所を有するに相違なしといへども美術の趣旨より考ふれば我を以て多とするも不可なきに似たり唯洋畫は形を畫くものなるを以て何人も習い易く我が畫は神を畫くものなるを以て多数の人は至り難し是を以て我が普通の畫は見るに足らざるべきも其畫なるものに至っては君の参考に供すべきもの少なからざるべし氏曰く真に君の言の如し日本画は日本の特有にして世界中他に其比を見ると能はず固此藝法は支那より來りしものなりとの事なるが我が考にては日本に於て全く出藍の色ありといふべし我は日本人が洋画を学ぶを止めて益す其固有の畫を發達せられん事を望む物なり (未完) 」

この記事の中で日本画の中で北齋が最も好きだと述べ、これは絵の中の絵だと言って床の間にある、日本に來て購入した雨の中に咲く花を描いた日本画についても褒めてゐる。これは柴田是真の作<sup>27</sup>だった。そして日本画と洋画についてふれ、日本人は洋画を学ぶのをやめて日本固有の日本画を發達させることを望むと言っている。

この続きが二日後の9月23日に掲載された。

「 會話 ラバルト、ブルーム氏 O. S. Y.

此時余又話頭を転じて曰く君は画家なり美術家なり君の身を以てニューヨークに住むこと易きか將に日本に於て楽しきか — 余の突如たる問に対して氏はにわかにならざる能はず問ひ返へして曰く我は君の意を解する事能わず願くは尚其歩を進めよ余曰く然らば先づ余の心を陳ぶべし余の初めて米国に到るや諸事の盛大なるに驚けり家屋の建築室内の裝飾都人士の衣食皆我邦に数倍し其・止行歩実に意氣揚揚たる色あり、余邦に数倍し其・止行歩実に意氣揚揚たる色あり、余謂らく是れ文明の国なりと已にして居ると数年我が胸間の感情は漸く滅却し去りて米国は住み難きの処なるを知り同時に米人の快樂我が邦人に如かざる事を悟れり、何ぞや米人は概ね皆ダラの奴隸なりダラの為に其手を動かし其心を勞し愈々走りて愈々止まらず家に千万金を貯えて却て安眠する能はざる者此々皆是れなりアスターは其少年の時に當てや活発有情の男子なりしも己に金満家と稱せらるるに至ては神思阻喪因循無情の阿蒙と化しゴードは人呼んで鉄道王となすも其煩勞は其心を悩まして殆ど止む時なく恰も故らに重荷を負うて險路を走るの駑馬に異なら

---

<sup>27</sup> 柴田是真 1807-1891 江戸後期から明治の日本画家、蒔絵工。河鍋暁斎と並び欧米で高い人気を得ている。この絵はブルームの死後、異母姉によってシンシナティ美術館に寄贈された。

ず余の知友なる米人は當て罵りて曰く日本の紳士と稱するものは其生計米国の犬に及ばずと余は今却て米国の鉄道王海上王等は我邦の下卑しに比して其快樂の少なきを思ふなり故に余は米国に於て非常の長所あるにも拘わらず一生を彼の地に送る事を願はざるなり、而して余今君に向かって特に此言を為す所以のものは君は美術家なるを以てなり君以て如何となす氏曰く君の言少しく過ぎたる所なきに非らずと雖ども大体に於ては斯くの如きものあり一国の方針一方に偏するは喜ばしからざる事にて諸事各其処を得さ閉めざるべからず我は自ら米人のダラを崇拜するの甚しきを嘆ずるものなり特に我等美術家の為には好ましからぬ所なるを以て我は特に他国に遊び是れまでニューヨークに居り氏よりは寧ろヴェニスに居りし方多かりき而して今や日本に居り働くの暇あって又楽しむの暇あり恰も故郷に居るの思あり何となれば我々美術家の故郷は閑雅幽邃の住む所なればなり唯此上は速に來春を迎えて世界に名高き桜花を臺堤賞するのときを待つのみ余曰く之に先して菊花の時紅葉の節あり將に來りて君の戸を叩かんとす君見て我邦の真相を伺ふを得べきなり氏曰く時來らば君願わくは我が為に東道の主人たれと余半ば託して帰る (完) 」

O. S. Y. の署名で記事を書いたのは矢部新作記者だった。矢部はサンフランシスコに行ったことがありアメリカの事情を分かっていたと思われる。

ブルームはこの記事をニューヨークに送り、スクリブナー誌の編集者はこれを英語に訳してシンシナティに住むブルームの両親に送った。

ブルームは版画にも興味を持ち 12 月 18 日には執行に案内してもらって工房に出かけた。スクリブナー誌の編集者に手紙を書きいずれこの版画についての記事も書きたいと提案してみた。編集者は同意したがこの記事はブルームの時間が取れず、掲載されることはなかった。ブルームが日本で購入した版画は 600 点近くに及び、北斎の「富嶽百景」も含まれている。

8 月から描き続けていたジャポニカの挿絵は 50 点にも及んだ。

このころ バッチャーに書いた手紙には

「8 月 4 日に出版社から催促の電報が来て 8 月半ばまでに(第一部の)挿絵を仕上げで送るよにと言ってきた。8 月 15 日までには間に合わなかったが 27 日に仕上げた。出版社が承知するかどうかわからなかったが、もっと時間をくれと頼み、第二部は挿絵が間に合わないの前半と後半の二つに分けて載せるよう(電報で)提案した。幸運にも承知してくれた。9 月末までに挿絵 17 点を描いた。君も容易に想像できると思うが私は懸命に働いた。でも前半のよりもっと多く描くことはできなかった。10 月終わりまでにはたった 9 点しか描けなかった。そして第三部がやってきた。説明が面倒だから詳しいことは言わないが、挿絵 8 点しか描くのに成功しなかった。やっと終わった。」

とあり、いかに根を詰めて描いていたかが分かる。

そしてそのあとに「これは私のせいではない。もっと時間があつたら、私自身にも他の人たちにも好評を得られたらうに。これが不可能な場合にはいったん始まつたら締切までに渡さなくてはならない。ともかくやつとできた！ 初めの挿絵は楽しかったが最後のは全く楽しくなかった。」<sup>28</sup>

ずっと仕事に追われていたが12月までにはニューヨークのスクリブナーズ誌に挿絵をすべて送ることが出来た。

この後ウィグモアの日本の国会開催の記事に添える挿絵に取り掛かりそれも終わった。

年が明けて明治24年1月17日のブルームについての記事がまた毎日新聞に載った。

「ブルム氏<sup>29</sup>の日本に関する所感　ノバルト、ブルム氏はエドウィン、アーノルド氏の日本に於ける文章著述をスクリブナーマガジーンに掲載する為めに併せて是れに付き日本の絵画を挿入せんが為め特に同社より派出され今尚は有楽町に寓居し居る人なるが自ら日本に対する所感をスクリブナー誌に投書して曰はく日本は希臘ならびに江埃及と其風致を同ふせり余は此地に在るを殆ど一月身は恰も奇絶妙絶の間に彷徨へり余は彼を見是を聞きいよ思いいよ考えて其・・・の究極する所を知らず恰も朦朧たる眼鏡を通して幽邃無限の好景に対するに似たり余は茶亭に遊び寺院を訪い日本の音楽を聴き日本の舞踊を見日本の酒を飲み日本の食を喰ひ最早や箸を取って邦人の笑を免かるるに至れり実に住むべき国は日本なり余は日本に在りて始めて人生、生存するの価値あるを覚ゆとヘラルド記者は之を見て笑つて曰く茶の何処より生出し漆器の如何にして製造するかを知らざるの論なりと彼も是、是れも亦是」

そして同じ月の1月、アーノルドは英国に帰って行った。

アーノルドとの仕事が終わって肩の荷を下ろしたブルームはさあこれから自分の描きたい絵を制作できると思った矢先、ひどい風邪にかかってしまう。肺炎と胸膜炎を引き起こしてしまい、横浜にいた医師エルドリッジの世話になってようやく3月になって回復した。

---

<sup>28</sup> Otto Bacher への手紙, 1890年12月6日、Smithsonian Archive

<sup>29</sup> Blum の読み方はブルムまたはブルームとなるが、彼自身が明治23年10月20日付けの Otto Bacher 宛ての日本からの手紙の中で「ブルーム」とかたかなで署名している。また B. Weber によると両親がドイツからの移民なので「ブルーム」と発音していた。もともとはフランス系の名前で英語の “Bloom” にあたるという。

4月5日には向島の桜を觀に行きパステルでスケッチした。この絵は現在ニューヨークのメトロポリタン美術館に収蔵されている。これをもとに油絵を仕上げたかったらしいが、実現できなかった。

ところが6月にまた消化不良で体調を崩してしまう。その上肺炎まで再発した。この同じ時期、ブルームの母が亡くなった。シンシナティから知らせを受けて悲しみに沈んだブルームは来日して以来書き続けていた日記を止めてしまう。

8月9月は療養のため日光にあるエルドリッジ医師の別荘で過ごした。

弱気になったブルームは9月に帰国しようかと思う。

そのブルームを心配してわざわざニューヨークから日本までやって来たのが友人の画家、ジュールス・ターカス (Jules Turcas)<sup>30</sup>だった。

ブルームはターカスを迎えに日光からいったん東京に戻り横浜に行った。

明治24年(1891年)の9月29日の手紙

「ジュールスが無事着いた。20日、21日と横浜に行って待っていたが船が着かないのでがっかりして寝た。ところが午前1時ごろ、ミヤケに起こされた。船が着くと伝わってきたのだ。(中略) 朝 サンパンで船まで行った。(中略) ジュールスの後ろに近づき背中をたたいた・・・」<sup>31</sup>

この友がせっかく日本にやって来たのだからもう少し滞在して彼に日本を見せてやらねばと思う。

9月に自宅の庭に木造でガラスのついたアトリエを建てた。

やっと健康も取り戻したブルームは12月になって父に手紙を書いている。

「失った時間をとりもどさねば・・・アメリカに帰った時に何か作品を見せることが出来るように。」<sup>32</sup>

その後ターカスと共に再び日光に戻っていった。

---

<sup>30</sup> Jules Turcas 1854-1917 キューバ生まれの画家。ターカスも日本で描いたがその作品はどこに存在しているのか現在は分からない

<sup>31</sup> Otto Bacher への手紙 1890年9月29日 American Art Archives, Smithsonian, Washington DC。

<sup>32</sup>シンシナティの父宛,明治24年(1891年)12月2日、確かに、彫刻、彩色そして金を施した木工品の絶妙な美しさがある。すばらしく魅力的だ。も

日光の周りの木々や景色は素晴らしかったが建物はあまり気に入らなかったらしい。確かに、彫刻、彩色そして金を施した木工品の絶妙な美しさがあり魅力的だが、寺院の建築より勝っている、そして寺院建築も同じように素晴らしければ世界のもっとも価値ある記念碑として仕上げられたに違いない、日本人は小さな物作りにより優れていると書いている。

そして景色について、木々の間から漏れる陽の輝きを描くにはリコ<sup>33</sup>やフォートウニイなら捉えられるだろうと書いている。それはしかし自分にはとらえるのが難しいと言うことではなかろうか。日光にはたびたび行っているが油絵の風景画は制作されなかったようだ。日光で描いた素描をひとつだけ“An Artist in Japan”には載せているがそれは風景や寺院ではなく祈る人を描いたものだった。

帰国前にターカスらと伊香保へと写生に出かけた。

日光と反対に伊香保はとても気に入り、街中にイーゼルを立てて何点も写生している。

「質素な伊香保は誇りの「日光」の堂々と近寄りがたい貴族的な素晴らしさの極端な反対で絵になる「ぼろと切れ端」の場所だった。我々は日常のおなじみの俗事に非常に魅了され、すぐに気に入った。すぐさま熱心に仕事にかかった。写生道具の紐を解き、イーゼルとスツールを通りに置いた。これをみても 我々の生き生きとした熱意、情熱が分かるだろう。山の険しい斜面に構築された伊香保はユニークな眺めの通りを形成する無数の石段を登っていく。その特質のため普段見られない角度を求めての珍しい機会を提供してくれる。梯子のような通りや家が空に登るように層になって建っている事で、町は他の日本の村と明らかに奇抜なコントラストとなっている。他の村では絵になるのは全体ではなくて個々の物や孤立した物などの「小さなかけら」に制限される。快適さを愛する観光客の流れから伊香保は遠く離れているのでたどり着くのに面倒で時間がかかる。そのおかげで昔風の魅力と礼儀が保たれている。我々にとっては新鮮で心地よい。」

34

---

<sup>33</sup> Martin Rico 1833-1908、スペインの画家。1874年にはフォートウニイと共にイタリアを旅行。ヴェニスを描いた作品で知られている。

<sup>34</sup> Robert Blum “An Artist in Japan” Scribner’s Magazine June, 1893

これらの作品を後の“An Artist in Japan”の中に3点載せている。そのうちの一つ、水彩画“A Street in Ikao, Japan”は現在ニューヨークのメトロポリタン美術館に収められている。他の伊香保の水彩画はシンシナティ美術館に1点、クラーク・アート・インスティテュートに3点収められている。

日本で描いたブルームの作品には風景画より人物画と街の様子を描いた作品が多い。庶民の生活はもっとも興味をひかれた題材だった。



A Street in Ikao, Japan 水彩

「[路上で見るあらゆる小さい事は私に大変興味を起こさせる。見ること自体が私に洞察力と思考の糧を与えてくれる。]<sup>35</sup>

「赤茶けた筋骨たくましい労働者、行商人、売り子、流しの芸人などはスケッチしたい人を誘惑する。歩き方、態度、顔つきは私にとって目新しいものだ。」<sup>36</sup>

路上で見た人々を描いた代表作は「飴屋」。ジャポニカには飴屋のスケッチが載っており、油絵の「飴屋」とは構図が違ふ。このスケッチの下には画家のノートとして「とても興味深い行いだ、最もシンプルにガラス吹きを使って飴を吹いて製品を作る。かわいくて美しく職人の技で芸術的だ。」<sup>37</sup>と書いてある。この飴屋はとても気に入ったモデルだった。何度も来てもら



飴屋のスケッチ、“Japonica”の挿絵より

<sup>35</sup> Robert Blum “An Artist in Japan” Scribner’s Magazine June, 1893

<sup>36</sup> Robert Blum “An Artist in Japan” Scribner’s Magazine April, 1893

<sup>37</sup> Edward Arnold, Japonica, p. 4

い、同じジャポニカの「按摩」の挿絵の背景の人物にもこの飴屋が荷を背負って歩いているのが見える。

ジャポニカの挿絵が終わった後で新しい構図の「飴屋」を油絵で描き始めた。画面手前には赤ん坊をおぶった少女がみえる。この少女もジャポニカに出てくる同じモデルらしい。この油絵の裏には手書きのラベルがあって伊香保の



飴屋、油彩

場面だと書いてある。おそらく人物は東京のアトリエでモデルを使って描き、背景は伊香保のスケッチから構成したと思われる。

ブルームは来日前に何度も訪れたヴェニスでも同じように手仕事の題材を好んだ。「ヴェネチア・レースを作る人たち」「ヴェネチア・ビーズを通す人たち」など。ブルームは手を動かして美しいものを作る人々とその作業に魅せられたのだろう。

この油絵の「飴屋」は帰国後すぐにニューヨークの National Academy of Design 展に出品され、好評を得てブルームは会員に選ばれた。この作品も今はメトロポリタン美術館所蔵となっている。そして帰国の翌年出版されたスクリブナーズ誌の “An Artist in Japan” に挿絵として載せた。

油絵の作品としては他にも「目黒不動様」（ヴァージニア美術館）、「絹商人」（シンシナティ美術館）「花市場、東京」や「桜」などがある。

ブルームは風景よりももっと人々に興味を抱いたようだ。横浜に着いたその日に目を引き付けられたのは船の周りにやって来た小舟に乗った物売りや荷役人夫たちの姿だったと書いている。



A leaf from a Sketch Book

「着物の鮮やかな色彩があちこちに点々と目につく半裸の土着の群集は、客を求めて叫んでいる。素晴らしい、ごちゃごちゃした複雑な形態の絵になる男たち、私には他のものは見えず、彼らに見とれてしまい、観察するのに夢中になった。」<sup>38</sup>

日本の女性の美しさにもひかれ数多く作品を残している。

「彼女たちは慎み深く上品でとても自然にそうしているようにみえる。男性と主人に奴隷的に服従しているにもかかわらず、女性の状況を見れば思いもよらないほど気質が明るくて充実感がある」<sup>39</sup>

「日本の女性から目が離せない。彼女たちは上品でしとやかで・・・女らしい。」<sup>40</sup>

そして人々の服装が西洋化されていくのを嘆いている。

「女性はまだ伝統的な着物を着ている。素晴らしい。・・・新しい（西洋式な）髪型は似合わない。」<sup>41</sup>

服装だけでなく町がどんどん西洋化されていくのにも心を痛めた。「もちろん文句を言ってもしょうがないが日本人のなんでもてきぱきと解体し、世界に追い付こうと熱望し順応しようとしているのを見ると憂鬱になる。」<sup>42</sup>と書いている。

美術評論家のマーティン・バーンバウム<sup>43</sup>はブルームの油絵はパステルや水彩ほどうまく



Picture Book, 油彩

<sup>38</sup> Robert Blum “An Artist in Japan” Scribner’s Magazine May, 1893

<sup>39</sup> Robert Blum “An Artist in Japan” Scribner’s Magazine April, 1893

<sup>40</sup> 明治23年6月8日の日記。

<sup>41</sup> Otto Bacher 宛 American Art Archives, Smithsonian, Washington DC

<sup>42</sup> Robert Blum “An Artist in Japan” Scribner’s Magazine April, 1893

<sup>43</sup> Martin Birnbaum (1878-1970) 美術評論家、ディーラー

いっていないと書いている。ブルームの完成されたキャンバスを見るときちんとしすぎ  
ていて硬さがありブルーム自身もこの硬さを好きではないと言っている。そして油絵具  
は好きでないとも。油絵に対して「Nasty」と言う言葉をブルームは使っている<sup>44</sup>。色  
が濁る、扱いにくいという感覚だろうか。しかし“Picture Book”という寝そべって絵  
草子を眺めている女性の姿をとらえた油絵の小作品があるが それには他の油絵と違い、  
硬さはみられず、むしろその場でさっと仕上げた勢いがあると思う。結い上げた髪や着  
物の色、柄に魅入っている表情などをよくとらえている。

たしかに、パステルの作品には油絵よりも思い切った色使い、流れるような感覚がみ  
られ、はっとさせられる。

ブルームは来日する前、ヴェニス滞在中  
にホイッスラーと出会い、一緒に写生した<sup>45</sup>。なかでも彼のパステルに影響をうけ自  
分でもパステル制作に打ち込む。アメリカ  
に帰りウィリアム・メリット・チェイスと  
“Society of Painters in Pastel”とい  
うパステル協会を1882年に設立した。チ  
ェイスはアメリカ印象派の画家として第一  
に名が上がる画家で優れたパステル作品も  
残している。ブルームがこのパステル協会  
の会長となり、ニューヨークで4回ほどパ  
ステル協会展を開いた。これはブルームの  
日本行きのせいもあって1890年には消滅  
してしまった。ブルームのパステルへの評  
価は高く、パステルが画材として合ってい  
たのではないかと思われる。



Blue Obi, パステル

日本で初めてパステル画を描いたのはブ  
ルームだった可能性が高い。彼の前に来日  
した画家もいるのだが日本で描いたパステルの作品は見当たらない。このあと来日した  
リラ・キャボット・ペリーはパステル画を何点か残している。

私の一番好きなブルームのパステル画の「青い帯」。夏の暑い日にちょっとけだるそ  
うな表情で立つ女性の青い帯。ニコライ・チコヴスキーは「ブルームのパステルの中で

<sup>44</sup> Martin Birnbaum, “Painters: Sculptors: Artist’s. 1919

<sup>45</sup> 1880年ホイッスラーとブルームはヴェニスでカサ・ヤンコヴィツに住み共に制作した。

も一番すぐれているのはこの“青い帯”だろう」と書いている<sup>46</sup>。メトロポリタン美術館蔵の「化粧する芸者」も鏡に向かう後ろ向きの一瞬をとらえている。クラーク・アート・インスティテュート所蔵の「日本の少女」も灰色の紙にパステルで若い女性の表情をとらえていて地味な着物と頭にかぶる白い手ぬぐいにわずかに添えられた色が生き生きとしている。迷いのない色使いだと思う。

1919年に出版されたマーティン・バーンバウムの本の中ではブルームのパステルについて次のように書かれている。「パステルを扱う技術のうえから言うなら、ブルームの日本を描いたパステル画に勝る物はない。小さな棒状のパステルでブルームは芸者の肌をまるで白粉油でもつけたかのような絹の肌に描き出す。思いがけないパステルの光沢が魔術のようにちりばめられて宝石のように輝き出す。」

死後、回顧展が開かれた際、ニューヨーク・イブニング・ポスト紙は「ブルームのもって生まれた才能にはパステルがよく合っている。すぐ逃げて消えてしまう光や色の扱いなどにおいて特にそうだ。」と書いた。友人の作家、オスカー・ワイルドは「ブルーム、君のすばらしいパステルは黄色のサテン布を食べているような不思議な感じがする。」と言っている。<sup>47</sup>

またニコライ・チコヴスキーは「パステルは素描でも絵でもあり得るし、線と色を併せ持つ表現手段は、気さくで、示唆的で素早い描写というブルームの感情的な好みに合っていた。非常な繊細さと洗練された芸術的な感受性においても同様に合っている。」<sup>48</sup>と書いている。

前にも述べたが、来日する前からブルームは日本にかなりの期待をしていた。これまで何かというと不遇でチャンスに恵まれなかった自分にとって、日本行は素晴らしい機会ではないか、この機会をつかんで画家としての足がかりができるのではと考えていた。ところが友人への手紙には来日した最初の頃の高揚感が消えていき、次第に手紙の雰囲気は変わっていく。

体の調子が悪かったせいもあるのか、思うように作品は出来ず、だんだん挫折とあきらめの言葉が出るようになる。

多分明治25年初めごろ書かれたと思われるバッチャー宛ての手紙。

「帰国しても画家として生計を立てることは難しい、イラストレーターとしてなら仕事はある・・・これは誰にも言わないでくれ、私にはチャンスがあった。だがつかむだけの

<sup>46</sup> Nicolai Cikovsky, Jr. American Impressionism and Realism, The Horowitz Collection, National Gallery of Art, 1999

<sup>47</sup> American Impressionism and Realism, The Horowitz Collection, National Gallery of Art, 1999

<sup>48</sup> American Impressionism and Realism, The Horowitz Collection, National Gallery of Art, 1999

力がなかった。それだけだ。もうたくさんだ。去年から分かっていたことだ。ジュールスが来なかったらとつくに帰国していた・・・」<sup>49</sup>

5月16日、再びバッチャー宛て。

「できるときには私はいつでも仕事はする。能力の限り精一杯やる。作品について悩んでいたがもう悩みを乗り越えた。物事が望んでいる通りにはならずうまくいかないと私はただ、（日本語で）シカタガナイーもうできることはない、それきりだーと言うだけだ。」

「私はかって印象だけで描いたら良いと思っていたが其の考えではもう満足できなくなった。一番悪いのは今描いている作品の結果には全くがまんできないということだ。」

<sup>50</sup>

バーンバウムはブルームは自分の仕事を過小評価していると書いている。<sup>51</sup>そして性格については「繊細な芸術家らしく自分の仕事に満足できない」と言っている。

さらに日本滞在の最後の頃になるとニューヨークの友人に宛てて望郷の念を綴るようになった。

明治25年8月30日、2年3か月の滞在を終えたブルームはターカスとミヤケを連れ帰国の途に就いた。

「（写生の旅から）一ヶ月後、私は蒸気船の甲板から輝いている空と下の夕方の海の間で 黄金のもやの中、夢のように次第に消えていく大地を見ていた。」<sup>52</sup>

ニューヨークに帰ったブルームはその翌年、日本での自分の体験を書いた挿絵付きの記事 “An Artist in Japan” を3回にわたってスクリブナーズ誌に掲載した。ニューヨークのメンデルゾーン・ホールの壁画の制作にもとりかかった。しかし帰国後10年して、45歳の若さで肺炎で亡くなった<sup>53</sup>。

---

<sup>49</sup> Otto Bacher への手紙 日付不明、Roll No.4863-4872、American Art Archives, Smithsonian, Washington DC

<sup>50</sup> Martin Birnbaum, “Painters: Sculptors: Artist’s. 1919

<sup>51</sup> Martin Birnbaum, “Painters: Sculptors: Artist’s. 1919

<sup>52</sup> Robert Blum “An Artist in Japan” Scribner’s Magazine June, 1893

<sup>53</sup> 亡くなるまで日本人の使用人、横浜出身の Kato Senta が側にいた事が 1900年の国勢調査の記録と死亡記事から分かった。

参考文献：

Bruce Weber, Robert Frederic Blum and his Milieu, 1985  
Robert Blum, “An Artist in Japan”, Scribner’s Magazine, 1893  
Sir Edwin Arnold, Japonica, 1891  
American Art Archives, Smithsonian, Washington DC  
New York Public Library Archives、 New York  
Martin Birnbaum, Painters: Sculptures Artists NY F.F. Sherman 1919  
American Artists in Japan, Hollis Taggart Galleries, 1996  
American Dreams, The Warner Collection, Virginia Museum of Fine Arts, 1997  
American Impressionism and Realism, The Horowitz Collection, National Gallery of Art, 1999  
The Retrospective Exhibition Robert Blum, The Cincinnati Art Museum, 1966  
Fine Lines, Brooklyn Museum, 2013  
Henry Finck, Lotus-Time in Japan, 1895  
American Pastels, The Metropolitan Museum of Art, 1989  
明治前期産業発達史資料第3回内国勸業博覧会資料 145  
復刻版横浜毎日新聞, 1994

これを書くに当たり麻布ニューズレター、「ザ・AZABU」編集委員の森明氏にたいへんお世話になりました。日本側の資料は森氏の調査なしではできませんでした。厚くお礼申し上げます。